

## 紡ぐ

福岡県立嘉穂高等学校三年（福岡県）

## 松田 萌香

めらめらと燃え盛る炎の中へと消えていく茶筌達。それと同時に飛ぶ無数の火の粉はまるで、彼らが全うした茶道具人生の終わりを告げるかのようだった。

二年前の冬、私達茶道部は代々使われてきて古くなった茶筌を持って、茶筌供養が行われる神社へと向かった。茶筌供養には、私達の他に、茶道に長年携わってこられたご高齢の方々など一般の方々も参加されていた。この行事に参加する前に、私達は顧問の先生から「茶筌供養」についての説明を聞いた。「茶筌供養というのはね、役目を果たした茶筌に感謝を込めながら、焚き上げて供養する行事のことなんですよ」この時点での私は、茶筌供養がどういう行事なのかがおおまかに分かっただけで、行事に対する思い入れというものは正直薄かった。私達茶道部は、一般の方々への受付や案内も行った。供養が行われる場所までは、階段を上らなければならなかったため、ご高齢の方々に来

られた際には荷物を持ったり、手を引いて一緒に歩いたりした。「寒い中、案内してくれてありがとうね」とたくさんの方々から声を掛けてもらえたことが嬉しかった。

案内が一段落つき、屋内の供養場所へ戻ると、茶筌供養が始まった。畳の上に正座し、目を閉じる。しんと静まり返った空間に少し緊張した。ほどなくして、お経の音が響き始めた。静寂の中、ただ一つ響き渡るお経は私を不思議な気持ちにさせた。お経が終わり、目を開けると、そこにあったのはたくさんの古くなった茶筌とその前で燃える赤々とした炎だった。「あ、もう茶筌達とお別れなんだ」そう悟った瞬間、私は言葉にできない切なさでいっぱいになり、それを今から見送らなければならぬんだと自分自身で実感した。炎の中に姿を消した茶筌達は、最期に何か言葉を遺すかのようにパチパチと音を立ててその役目を終えた。

茶筌供養が終わり、何とも言えない虚しさに包まれた私から声を出ようとすると、先程案内した一人のご高齢の女性から声を掛けられた。「茶筌供養、良い経験よね。供養したら、その物自体は無くなってしまふけれど、心の中ではまだ愛着が残ってるのよ」微笑みながらそうおっしゃっていたが、その姿はどこか寂し気だった。

行事に参加する前の私は、茶筌を供養することが示す意味が分かっていなかった。そんな私が、焚き上げられていく茶筌達を見た時に、自然と虚しく、寂しい気持ちになっ

た。これはきつと、私もあの女性と同じで心のどこかに思い起こされるようなものが残っていたからなんだと、後に気付いたのだ。この目を境に私の、道具に対する意識が変わった。茶碗や茶筌、その他の道具の古さや傷はそれぞれが茶道具として生きてきた過程と様々な人へと受け継がれていった証拠—だから私はそんな道具達に対して敬意を表し、もつと大切に扱わなければならないと思った。

　　供養される茶筌達に最期の言葉があつたとするならば、私にはこう聞こえたような気がする。「ありがとう。どうか新しい茶筌も大切に使ってあげてね」と。茶道具には、直接的な言葉こそないが、どの道具にもそれぞれの生きた証や歴史が詰まっている。そこに隠されたメッセージはその道具を手取る人々との間、現世代から次世代への架け橋を紡いでいく。